楓之典君乳母草子

～日日是猫日～　其ノ拾壱

猫の妙術

中條　恵子　陸自85

子曰。
三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。

師は言われた。
「敵がいかに大軍であっても、その司令官を奪いとろうと思えば奪いとれないことはない。しかしたった一人の凡夫であっても、その志を奪いとることはできない」

『論語』子罕第九

○　猫の妙術

黒・虎・灰の三猫に技・気・和と道理を示し、木猫の真髄も伝えた古猫殿。いよいよ勝軒に剣術の奥義ひいては人生の極意を説きます。

●　剣術は大変に臨みて生死を明らかにする術なり

夢のごとく古猫の言葉を聞いた勝軒は、前に出でて古猫に一揖して申しました。「私は剣術を修業して久しくなりますが、未だにその道を極めておりませぬ。今宵、猫の衆の話を聞いて我が道の極意を得ました。どうか、更にその奥義をお教え下され」

古猫は言います。

「いやいや、儂は獣でございます。鼠は儂の食物に過ぎませぬ。儂ごときが何故人様のなさることをわかりましょうか。しかしながら、かような話を聞いたことがあります。

そもそも剣術は専ら人に勝つことを修練するのが目的にはあらず。重大事に臨んで、生死を明らかにする術なりと。

侍たる者、常にこの心を養いその術を修業しなければ、侍と言われる資格はありませぬ。

まず、理（ことわり）に徹し、己の心から偏りやこだわりを捨て、疑いも迷いもなく、才覚思慮を用いることなく、心も気も穏やかにして物事にこだわらず、潭然としてあるがままならば、いかなる変化にも対応は自在にできましょう。

ただし、この心に僅かでもこだわりがある時は状（すがた）となって現れます。状が現れれば、敵があり、対する我がある。さすれば相対して争うこととなる。かようなことでは変化の妙用が自在にできませぬ。我が心は先んじて死地に陥り、霊明を失う。どうして快く立ちて明らかに勝負を決することができましょう。たとえ勝ったにしても、めくら勝ちというもの。剣術の本旨ではございませぬ。

とはいえ、こだわりをなくすと言っても、頑なな空（くう）ではありませぬ。心にはそもそも形はござらん。物を蓄えることはできませぬ。わずかに蓄える時は、気もまたそこに偏る。この気が僅かでも偏る時には、融通豁達であることはできませぬ。向き合う所は度が過ぎ、向き合わぬ所は及ばずとなる。気が過ぎる時は勢いが溢れて止めることができず、及ばぬ時は気が餒（うえ）て要を為さず。いずれも変化に応ずることはできませぬ。

儂が所謂こだわりをなくすと申すのは、不畜不倚（たくわえずたのまず）、敵もなく我もなく、向かい来る物事に随って応じ、また己の迹をも残さぬのみ。易経には、無思無為、寂然不動、感而遂通於天下之故（思いもせず為すこともなく、寂然として動かず、感によりて遂に天下の故に通じ）とあります。この理を知りて剣術を学ぶ者は、道理に近づくことができましょう」

●　古猫殿、見性を説く

勝軒は尋ねます。「敵もなく我もなし、とは何を言うのであろう」

古猫は言います。

「我あるがゆえに敵あり。我なければ敵なし。敵というものは、もともと相対して向かい合う様を言うもの。陰陽・水火の類（たぐい）のごとく、凡そ形象（かたち）があるものには、必ず相対するものがあります。我が心に象（かたち）なければ、相対するものなし。相対するものなければ、争うことなし。これを敵もなく我もなしと言うのです。

物事と我とを共に忘れ、潭然として一切の作為を持たぬ時は、和して一つとなります。敵の形を破ったにしても、我も知らない。いや、知らないのではなく、ここに念はなく、感のままに動くだけのこと。

この心が潭然として一切の作為を持たぬときは、世界は我が世界となります。是非好悪、囚われるところなきが故。皆、己の心から苦楽得失の境界を作るのですわ。天地広しといえども、我が心より他に求めるべきものはございません。

昔の人が言うには、「裏眼有塵三界窄心頭無事一牀寛―眼の中に塵が入れば広い世界も狭くなる、心に何も無ければ粗末な寝床も寛げる―」と。

目の中に僅かでも塵が入れば、目を開けることはできませぬ。元々は何もなく明らかに見えるところへ、物が入ったが故に見えなくなる。これは心の例えでありまする。

また、こうも言います。「千万人の敵の中にあって、たとえこの姿は微塵になろうとも、この心は我が物である。大敵であろうとも、これをどうすることもできぬ」と。

孔子様は、「凡夫であってもその志を奪うことはできない」と仰せになりました。

もしも迷うときは、この迷う心がかえって敵の助けとなりましょう。儂が申し上げられるのはここまで。

只自得—自ら理解し会得すること—と言います。以心伝心とも言えましょう。教外別伝—教えたわけではないが伝わる—とも言いましょう。これらは、教えに背くということではありませぬ。師にも伝えることができぬことがあることを申すもの。ただ禅学だけのことではありませぬ。聖人の心法から、芸術の末端に至るまで、自得は皆以心伝心。教外別伝でございます。

教えというものは、弟子自身にあって自らは見ることができぬ所を、指さして知らしめるのみ。師からこれを授けるものにはありませぬ。教えることも容易く、教えを聞くことも容易なこと。ただ弟子が己にあるものを確かに見つけて、我がものにするのは難しゅうございます。これを見性—人間に本来そなわる根源的な本性を徹見すること、即ち悟—と言いまする。悟とは、妄想の夢から覚めるだけのこと。覚ということも同じ。異なるものではございませぬ」

—『猫の妙術』完—

「猫の妙術」は、葛飾杖道会HP：https://sites.google.com/site/kjodokai/home、カナダ養心館道場HP：https://youshinkan.com/を参照いたしました。猫と大鼠の立ち会いや古猫殿の教えを物語として楽しむには、「新釈猫の妙術」（訳・解釈高橋有　草思社）をお勧めいたしまする。

○　楓之典君のつぶやき

—先々代・先代はお二方共に逸物なれど、ぷぅは「足るを知る」ただの匹猫にあります也—